

第21回脳機能とリハビリテーション研究会学術集会

2014年4月20日に開催されました、第21回脳機能とリハビリテーション研究会学術集会のご報告をさせていただきます。今回はこれまでと指向を変えて、午前の基調講演は2名の講師による2本立てで行われました。午後は一般演題や各種講座やセミナーを並行して4会場で開催しました。どの講演・講座も興味深い内容で、有意義な会となりました。一般演題では、口述発表、ポスター発表の合計28演題が発表されました。

基調講演の1・2は、どちらもあっという間に1時間が過ぎてしまいました。

基調講演1では、糸川昌成先生の臨床や研究に対する気概や情熱、純粹や一途さを随所に感じました。糸川先生は、一貫して患者目線であり、統合失調を治したい、患者を良くしたい、という思いが原動力であると感じました。講演の最後に話された、お母様のエピソードは、先生の著書にも記されてありますが、とても感動的に締め括られました。我々ももっと患者のために真摯に、臨床に研究に取り組まなければならない、誰のための、何のための研究なのかということに改めて気付かせて頂いた講演となりました。不思議なことに、そのような説教を糸川先生からは一言も発されていないのに、ビシビシと伝わってくるのが、とても面白く感じました。

基調講演2では、本研究会会長の沼田憲治先生による講演でした。これまで研究会を通じて報告されてきた症例の紹介が中心に構成されました。神経系障害例の示す様々な臨床所見は動作分析や筋緊張のみでは理屈がつかみません。従来の理学療法評価の限界や弊害を述べ、脳機能・脳科学から分析していくという評価戦略の必要性を説いて頂きました。この研究会は、当初から症例報告が推奨され、多くの新事実も報告されて来ました。そのことを踏まえると、この研究会の存在意義の一つが何であるかは容易に理解できます。

午後の各種講座・セミナーも大勢の参加者が集まりました。熱心メモを取る人、積極的に質問する人等、参加者の皆さんの真剣な眼差しが大変印象的でした。参加型、体験型の経頭蓋磁気刺激装置(TMS)のセミナーでは、演習を通じて、実際に皮質脊髄路の存在を体感できるというのも貴重であり、こちらも大変好評でした。



糸川昌成先生による基調講演1

統合失調症の解明と治療のため、飽くなき臨床家の苦悩と闘いが述べられました。写真は新著(「統合失調症が秘密の扉をあけるまで-新しい治療法の発見は、一臨床家の研究から生まれた-」)の説明場面。



沼田憲治先生による基調講演2

統計の落とし穴。集団の解析では外れてしまう症例をどう説明するのか? 脳損傷例で見逃してはならないポイントを解説され、1症例検討の重要性、必要性を説明している場面。



高杉潤先生による教育基礎講座1

神経系疾患の症例報告の書き方について、押さえておくべきポイントを分かり易く解説されていました。症例報告もポイントを押されば、研究としての価値も、報告の意義も高くなります。大勢の参加者が詰めかけ、みなさん真剣にメモを取られていました。



ポスター発表(ディスカッション)場面

特に発表時間などは設けずに、一定時間だけのフリーディスカッションでした。演者には変な緊張感はなく、演者と質問者で忌憚のないディスカッションが繰り広げられました。



山本哲先生による教育実践講義1



岡本善敬先生による教育実践講義2

脳機能とリハビリテーション研究会2014年研修会

11月24日に茨城県立医療大学で開催されました脳機能とリハビリテーション研究会2014年研修会のご報告をさせていただきます。参加者は34名、職種は理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、放射線技師と多職種での研修会となりました。

研修会は、午前中にCT、MRI脳画像の講義が行われました。

前半は、昭和大学藤が丘リハビリテーション病院の小笹佳史先生より、CTとMRIの特徴および診かたについての基礎知識について講義が行われました。画像読影のはじめの一步として、自分で絵を描くことが重要であり、Mass effectやMidline shiftなどの特徴的な所見を見逃さないことを学びました。

後半は、同じく、昭和大学藤が丘リハビリテーション病院の迫力太郎先生より、CTとMRIの所見の時間経過に伴う変化について講義をしていただきました。臨床所見と画像所見の変化を照らし合わせて評価することで、患者の機能予測・予後予測に利用できることを学びました。

午後は脳画像読影のグループワークが行われました。

前半は、各グループにそれぞれ異なる脳卒中患者の脳画像データを配布し、脳画像読影を実践しました。脳画像読影は、午前中に学んだ通り、まずはCTやMRI画像のお絵描きを実践し、渡された症例の病巣の同定を行いました。後半では、その症例の臨床所見と画像所見との照らし合わせを行い、臨床症候が出現する根拠について話し合わせ、発表のためのプレゼンテーション作成を行いました。最後に、メイン会場に集まり、各グループの発表とディスカッションが行われました。



グループワーク風景1

実際の画像を見ながら、資料を参照に病巣を同定し、障害を予測しています



グループワーク風景2

発表の準備に取りかかっています



グループ発表では活発なディスカッションが行われました。



集合写真

定例勉強会について

本研究会では、定例勉強会を約3か月に1回の頻度で開催しております。参加者は毎回20名～30名ほどで、PT・OT・STなど職種も多彩です。時には学生さんの姿も見られます。2014年度に行われた、第9回から第12回の勉強会を振り返り、概要を以下にまとめました。どの発表も興味深く、臨床でも生かせる示唆に富む内容ばかりでした。内容の詳細は、研究会のブログでもご覧になれます。勉強会開催のアナウンスは、事前にホームページ、ブログ、facebook、twitterなどで配信しております。ぜひ皆さんも参加してみてください。

第9回勉強会の報告

日時:2014年5月11日 13:00～16:30

会場:タワーホール船堀

症例検討

- 1.「脳出血後、病巣同側に片麻痺を生じた症例」
大村優慈 (国際医療福祉大学)
- 2.「橋梗塞により高次脳機能障害を呈した1症例」
若旅正弘 (鶴巻温泉病院)
- 3.「遷延性の重度幻肢痛がミラーセラピーで消失した右大腿切断例」
杉山聡 (下志津病院)、高杉潤(千葉県立保健医療大学)

プチ神経科学講座

「体性感覚の伝達経路とその評価」

岡本善敬 (茨城県立医療大学大学院)

第10回勉強会の報告

日時:2014年8月17日 13:00～16:30

会場:タワーホール船堀

プチ神経科学講座

「ヒトにおける神経生理学的研究-H反射による脊髄神経機構と痙性メカニズムの解明-」

梅原裕樹 (茨城県立医療大学)

話題提供

- 1.「脳画像における内包後脚の同定」
山本哲 (茨城県立医療大学)
- 2.「プレゼンテーションのコツ」
山本竜也 (つくば国際大学)
- 3.「高次脳機能障害入門—注意機能について—」
若旅正弘 (鶴巻温泉病院)

第11回勉強会の報告

日時:2014年11月9日 13:00～16:30

会場:タワーホール船堀

プチ神経科学講座

「片麻痺に間違われる運動障害-その症候の特徴と見極めるポイント-」

高杉潤 (千葉県立保健医療大学)

話題提供

- 1.「橋出血により損傷側に運動失調、反対側に運動麻痺・感覚障害を呈した症例の介入について」
濃畑陽二郎、市村大輔(多摩川病院リハビリテーション科)
- 2.「被殻出血により運動麻痺を呈した2症例の予後に関して～なぜ運動麻痺に違いが生じるのか～」
森田晃成氏、市村大輔氏(多摩川病院リハビリテーション科)
- 3.「脳卒中発症から3年以上が経過し、運動無視様の症状が残存している症例について」
今村武正氏(鶴巻温泉病院 リハビリテーション部)

第12回勉強会の報告

日時:2014年2月15日 13:00~16:30

会場:タワーホール船堀

プチ神経科学講座

「視覚と失認」

山本竜也 (つくば国際大学)

話題提供

1. 「中脳大脳脚(皮質橋路)の損傷により、lateropulsion様の症状が出現した症例としなかった症例の比較」
沢田達也 氏(麻生リハビリ総合病院)
2. 「非麻痺側下肢筋力の向上が起立動作時のpusher現象に及ぼす効果」
曾根佑太 氏(鶴巻温泉病院)
3. 「両側被核損傷症例への大脳基底核周囲機能検査の介入」
市村大輔 氏(多摩川病院 リハビリテーション科)
4. 「視覚、触覚刺激以外で誘発された本能性把握反応様の症状」
若旅正弘 (茨城県立医療大学附属病院)

その他:研究会関連事項

ホームページ:<http://www.noukinou.com/>

ブログ:<http://noukinou.exblog.jp/>

Facebook:脳機能とリハビリテーション研究会

Twitter:脳機能とリハビリテーション研究会nourihaken

Face book, Twitterでは、研究会の最新情報だけでなく、最新の研究成果(論文)を随時オンタイムでチェック・更新しています。最新の神経科学研究を知るには最適なツールですので、是非チェックしてみてください。